

あらひひろせ
荒井広瀬遺跡発掘調査 遺跡見学会資料
 約 2,000 年前の地震痕跡と津波痕跡を同時に発見!

発掘現場から
文化力
 POWER OF CULTURE

平成 25 年 6 月 30 日 (日)
 仙台市教育委員会文化財課

調査要項

- 遺跡名 荒井広瀬 (あらひひろせ) 遺跡
- 所在地 仙台市若林区荒井字広瀬地内
- 調査面積 271 ㎡ (1 トレンチ 170.2 ㎡、2 トレンチ 100.8 ㎡)
- 調査期間 平成 25 年 5 月 21 日～6 月末
- 調査原因 仙台市荒井東土地地区画整理事業
- 調査主体 仙台市教育委員会
- 調査担当 仙台市教育委員会文化財課
- 調査協力 仙台市荒井東土地地区画整理組合
 松本秀明教授 (東北学院大学地域構想学科)

調査に至る経緯と成果

本市では、仙台市荒井東土地地区画整理事業地内における発掘調査を平成 22 年度より実施してきました。沓形遺跡の調査では、弥生時代における 20ha もの水田域のひろがり確認され、また、それらが約 2,000 年前に発生した津波堆積物 (砂層) に覆われていた事がわかりました。

この沓形遺跡の西、約 200m に位置する荒井広瀬遺跡は、微高地の縁辺をかつて流れていた河川跡が弥生時代の遺物を伴って確認されたことから、平成 24 年 10 月 12 日に新たに遺跡登録されました。

今回の調査では、河川跡 1 条、溝跡 1 条 (弥生時代) の他、弥生土器、土師器、木製品が発見されました。なかでも弥生時代の溝跡の調査では、底面から地震痕跡である地割れ跡、そしてそれらを覆う津波痕跡である津波堆積物が確認されました。



図 1 荒井広瀬遺跡の位置
 (2000 年前、弥生時代の海岸線は第Ⅱ浜堤列の海側 (現海岸線から 2km) にあったと考えられています。)



写真 1 確認された遺構 (2 トレンチ)
 (溝跡は幅 1m、深さ 20cm 程、河川跡は幅 20m 以上)



写真 2 地割れ跡から石器発見 (2 トレンチ)
 (地割れ跡は、幅 5~20cm、深さは 50cm 以上)

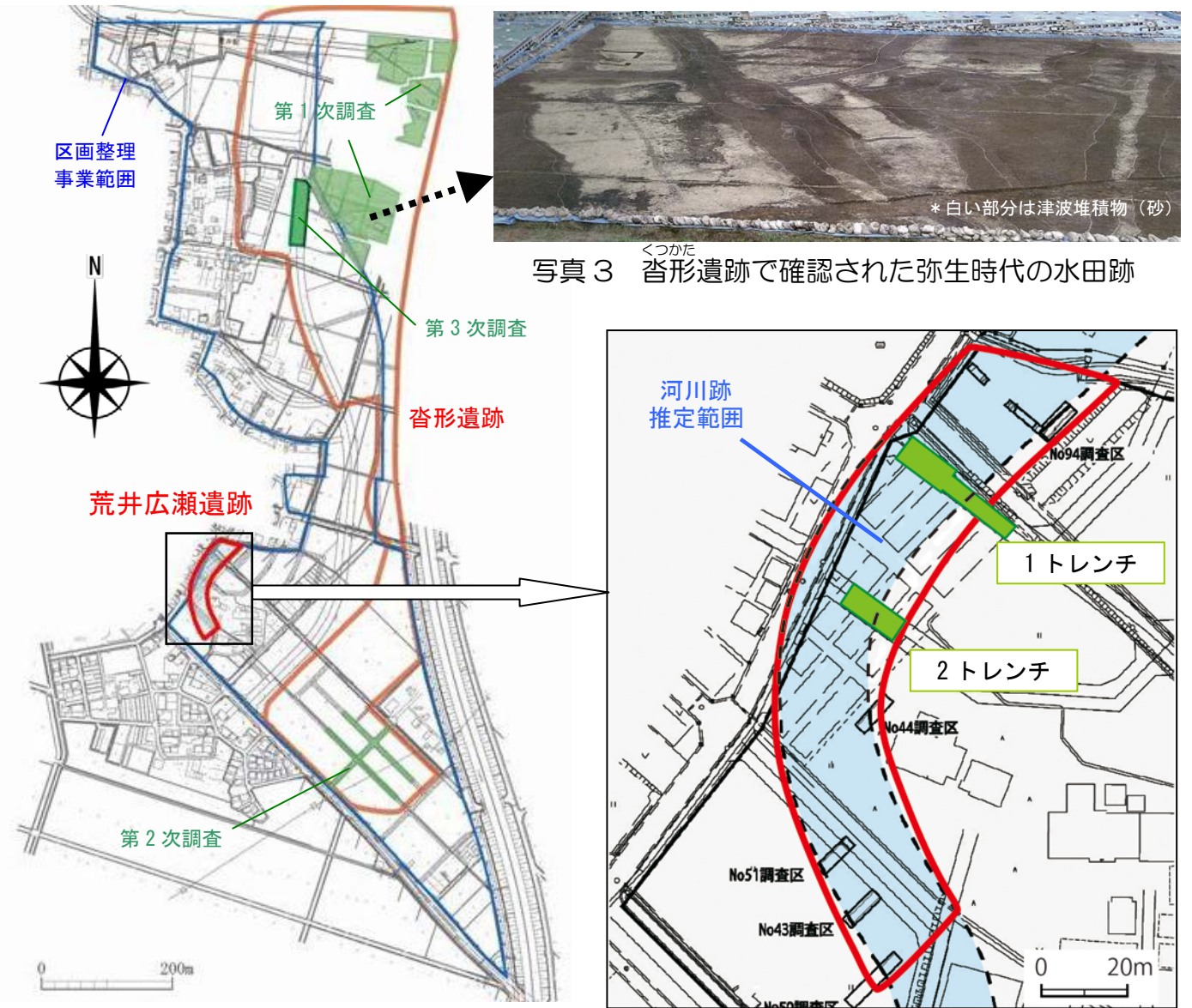


図 2 荒井広瀬遺跡の位置

図 3 調査区配置と河川跡の推定位置

図 4 調査区 (2 トレンチ) 平面図

0 2m

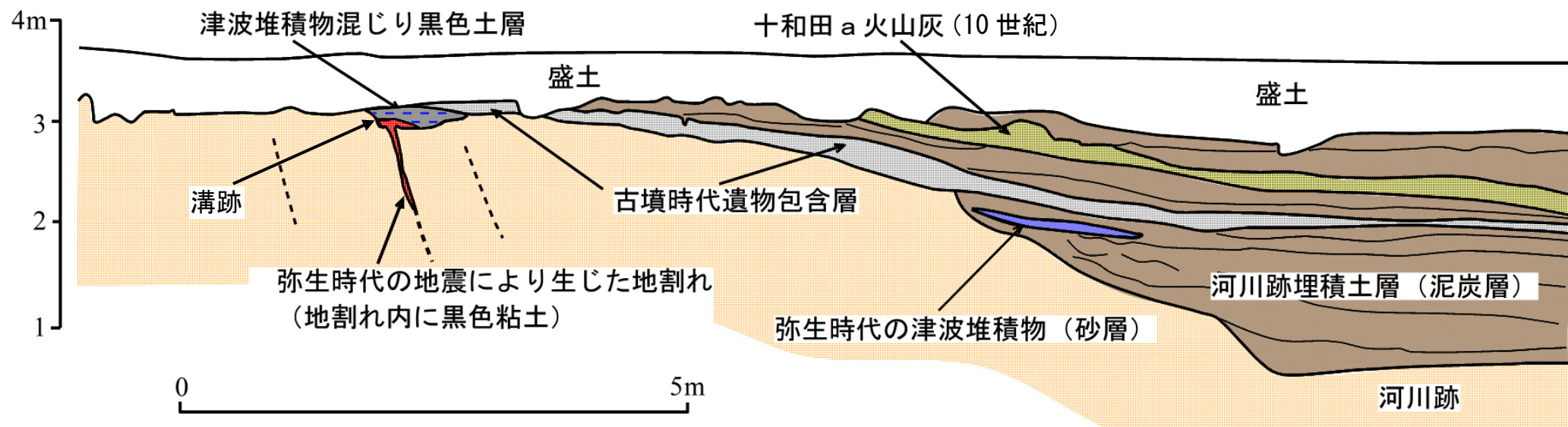


図5 調査区(2トレンチ)断面模式図(東北学院大学地域構想学科 松本研究室作成)



写真3 調査区(2トレンチ)南西壁断面

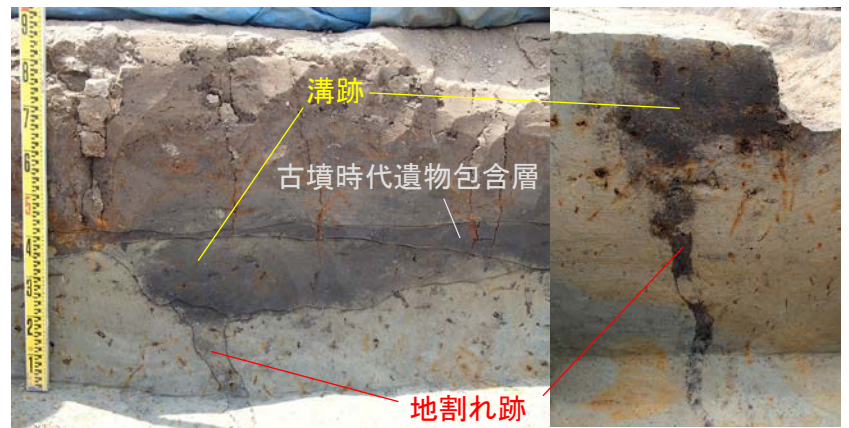


写真4 溝跡と地割れ跡の断面(2トレンチ)



写真5 溝跡から発見された弥生時代中期の土器

弥生時代の地震痕跡が発見されたことの意義

2007年度の沓形遺跡の発掘調査で、弥生時代の津波堆積物(砂層)が発見されました。その津波は当時の海岸から2.5km内陸地点まで海浜の砂を運んでいました。2011年3月11日に発生した津波(砂の運搬距離は2.3km)と同等かそれを上回る規模の津波であったと考えられます。津波は地殻変動による海底の変位により発生しますが、弥生時代の津波に対応する地震の痕跡は沓形遺跡の調査では確認できませんでした。

荒井広瀬遺跡で発見された細かな地割れは河川跡として存在していた細長い凹地を縁取るように形成されています。地割れは地面が地震動により河川跡側に移動したためにできたと考えられます。地表に存在した泥質堆積物や石器が地割れに吸い込まれたような状態で発見されていることから、地震の最中に地割れが大きく開閉したことも分かります。この地震痕跡は弥生時代の津波の波源域が日本海溝周辺にあったことを示す重要な証拠と考えられます。(松本秀明 東北学院大学)

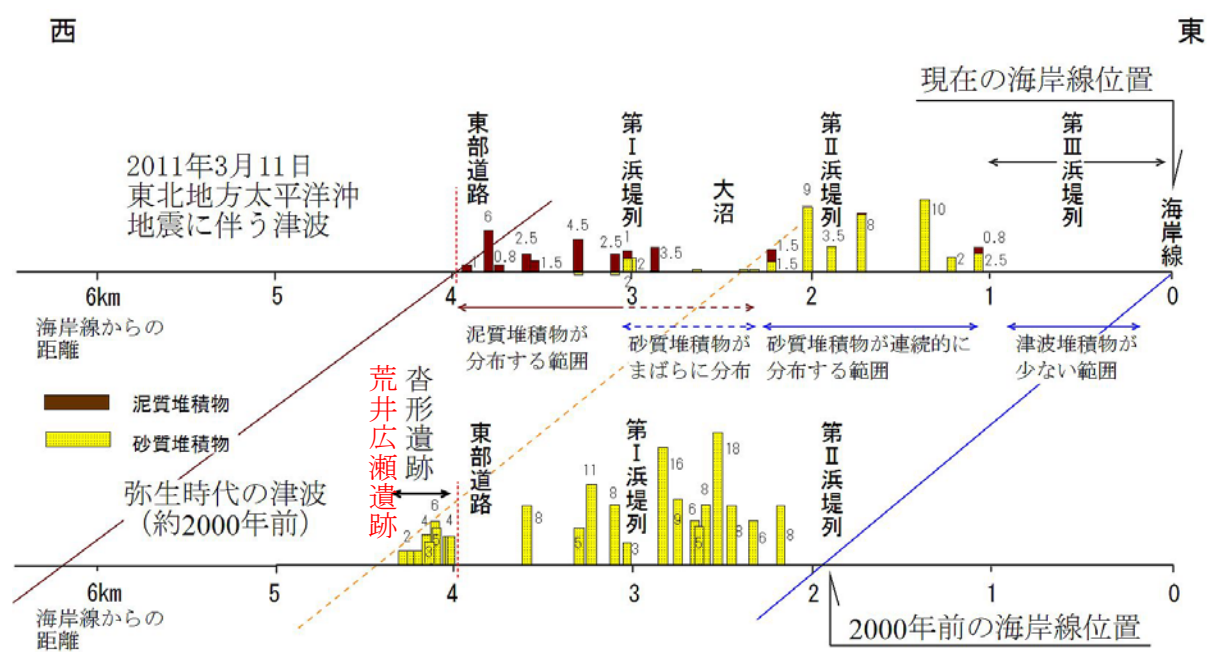


図6 2,000年前の津波堆積物と東日本大震災の津波堆積物の分布範囲(東北学院大学地域構想学科 松本研究室作成)

まとめ

今回の調査で、沓形遺跡で見つけていました、約2000年前の弥生時代中期の津波が、日本海溝周辺で発生した地震に伴うとわかりました。この震災によって、仙台市域の沿岸部では、集落が陸側へ移転し、それから400年ほど経った古墳時代になって再び集落が作られています。東日本大震災と同じような震災が2000年ほど前にも起こっていること、その後も、規模の違いこそあれ、繰り返されてきたことを、土地に残された地域の記憶として、今後の防災・減災に役立てていきたいと考えております。

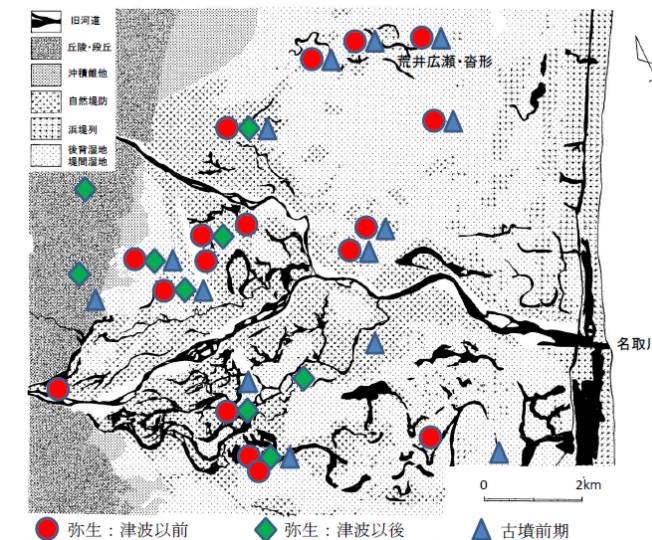


図7 仙台平野中部 弥生～古墳前期の遺跡分布